

子どもの励みにしたい評価・通知表

真鶴町立まなづる小学校 学級懇談会資料

令和2年12月11日

国が定めた「教育課程の基準」である「学習指導要領」が平成29年に改訂され、今年度より完全実施されています。それに伴い、学習評価の観点が今までの4観点から3観点到整理されました。また、通知表についても、昨年度と一部形式が変わりました。変更した内容とともに、「子どもの励みになる評価・通知表」についてお伝えしていきます。

【昨年度からの変更点】

5・6年生の「外国語活動」が、教科「外国語」になります

昨年度までは、「外国語活動」として、通知表にも活動の様子が文章で記載されていました。今年度からは、国語や算数などと同様に、教科として評価しています。

「出席の状況」は、別紙でお伝えします

通知表に記載されていた、「出席の状況」については、別紙にてお知らせします。そのため、通知表には記載されません。なお、今年度はコロナ感染対策による休校で、5月の登校がありませんでした。そのため、5月の欄が空欄になっています。また、2学期に配付する出席の状況は、11月までのものとなります。12月以降の出席状況は、3学期末にお知らせします。

各教科における観点別学習状況の評価の観点が4観点から3観点になります

新しい観点は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」です。（昨年度までは「知識」と「技能」が分かれていました。）

「知識・技能」

- ①学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価します。
- ②習得したものを今まで身に付けてきた知識や技能と関連付けて、他の学習や生活場面にも生かせるまで意味内容を理解したり、技能を身に付けていたりするかを見取ります。

「思考・判断・表現」

- ①知識及び技能を活用して、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等が身に付いているかを評価します。

「主体的に学習に取り組む態度」

- ①知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を身に付けることに向けた粘り強い取り組みを行うかとしているかを評価します。
- ②自分の学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかを評価します。

【よくあるご質問から】

Q1 3年生からの「評定」は、どのような評価なのですか。

A 到達度に関係なく集団での位置を示す「相対評価」には、児童・生徒の進歩が現れにくい、学力の実態を必ずしも反映しない、評価される者同士の過度の競争心をあおるなどの批判がありました。また、個に応じた指導を行うためには「目標に準拠した評価」が必要であるとの考えから、平成13年の改訂から、各教科の評定についても他の児童との比較ではなく、観点別学習状況を基とし、教科の目標に照らして、その到達度を総合的に評価しています。

例えば理科で、3つの観点別評価の結果が「◎◎◎」や「◎○○」であれば、理科の評定は通常「3」と付けられます。

各教科の評定

- 3 十分満足できる（よくできている）
- 2 おおむね満足できる（できている）
- 1 努力を要する（がんばろう）



Q2 行動の様子はどのように評価するのですか。

A 各項目（基本的な生活習慣/健康・体力の向上/自主・自立/責任感/創意工夫/思いやり・協力/生命尊重・自然愛護/勤労・奉仕/公正・公平/公共心・公德心）の趣旨に照らして、学年や発達段階からみた学習や生活などの様々な場面から、その内容について十分満足できる状況にあると判断される場合に○が付けられています。

Q3 「特別の教科道徳」はどのような学習をするのですか。また、どのように評価するのですか。

A 授業で学習する道徳の目標は道徳性の育成です。道徳性とはよりよく生きようとする人格の基盤とも言えます。道徳では、おもに教科書の題材をもとに話し合い、その中から児童の道徳的なよさを認めたり、道徳的成長を見取ったりしながら評価します。またこうした評価は他者との比較ではなく、児童自身にみられるよさの中から評価したり、以前よりどれだけ道徳的成長があったかを見取ったりして評価します。こうした評価を個人内評価といいます。

このような道徳性は数字などによる評価は適切ではありません。授業で見取ってきたことをもとに、3学期に年間の学習を通して身についたことを記述し、評価とします。

<参考> 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳 文部科学省

Q4 家庭として学校から評価を受けとったら、どのような対応をすればよいですか。

A1 <良さを見いだす>

児童一人一人が、教科等の目標をどこまで達成したかを示していますので、御家庭では、受け取った結果をお子さんと一緒に御覧いただき、よく達成できたところはほめてさらに伸ばしていただくように、課題があるところは、今後どのように学習していくか、お子さんと共に確認してください。

また、直接成績に表れていなくても、「最後までやりぬく根気が向上してきたこと」や「さりげなく優しい心遣いができる」など、その子のうちにある「良さ」を見いだしさらに伸ばしていくことも教養育てていくためには必要です。「通知表」が学校と家庭が手を携え、お子さまの成長を共に認め励ましあえるものになることを願っています。

A2 <自己肯定感を育てる土台づくりを大切に>

子どもには、その子の存在そのものが受け入れられ、認められるということが必要です。自己の存在が認められ、喜ばれ、無条件で愛されているという実感が成長の土台となります。たとえ、どんなに△があっても、「あなたは大切に価値がある」というメッセージが子どもには重要です。その土台の上に『自分は〇〇もできた』という自信をつけていき、「□□もがんばってみよう」とチャレンジをしていくものです。

しかし、ともすると「〇〇ができるから、存在価値がある」「□□ができないからダメな人間だ」と逆になってしまいやすいのも事実です。

まず、保護者や周りの大人が、その子の土台となる自己肯定感を育てていく言葉がけを大切にしていくなければいけないことをご理解いただきたいと思います。

<参考> 「公立小学校・中学校 これからの学習評価」神奈川県教育委員会